

## 史料1 相馬師常

・『吾妻鑑』元久二年（一二〇五）十一月十五日  
十一月十五日、丁酉相馬次郎師常卒「年六十七」、令<sub>二</sub>端座合掌<sub>一</sub>、更不<sub>二</sub>動搖<sub>一</sub>、決定往生敢無<sub>二</sub>其疑<sub>一</sub>、是念仏行者也、称<sub>二</sub>結縁<sub>一</sub>「緇素挙集<sub>レ</sub>之

## 史料2 東胤頼

・『法然上人行状絵図』第四十二（四十八卷・勅集御伝）  
西郊にわたしたてまつるに、路次の障難ををそれて、宇津宮の弥三郎入道蓮生、塩屋の入道信生、千葉の六郎大夫入道法阿、渋谷の七郎入道道遍、頓宮の兵衛入道西仏等、出家の身なりといへども法衣のうへに兵杖を帯して、御ともに参じければ、家子郎等などあひしたがひける程に、軍兵済済として前後にかこめり。遺弟以下御ともに参ずる人一千余人、おのおの涙をながしかなしみをぞふくみけり

## 史料3 東胤頼

・『法然上人行状絵図』第四十三  
さて姉小路、白川祓殿の辻子といふ所に、妹の尼公の侍ける、いほりのうしろに、ひさしをさして、身ひとつおさむるほどに、わらをもちてゆひまはして、そのうちに

こもりゐて、かみの衣を着し、食時便利のほかは、一向

に念仏す。小土器六をならべて、香をもち火をけさず、とりうつしとりうつして、念仏しけり。ひとにも対面せず、生涯は別時なりけり。ついに元久元年の冬、臨終正念にして、端坐合掌し高声念仏すること数遍、念仏のこえにていきたえぬ。そのあたり五六町のうち、異香芬馥す、室のうち、三年までかうばしかりけるとなむ。東山延年寺のうゑの山に葬す。着するところのかみの衣、異香はなはだし、たづねいたるひと、面面にわかちとりにけり。終焉のとき、貴賤男女はしりあつまりて、結縁しけるなかに、大番の武士、千葉の六郎太夫胤頼これを見て、たちまちに発心出家す。上人給仕の弟子法阿弥陀仏これなり

## 史料4 津戸三郎為守

・『法然上人行状絵図』第二十八  
武蔵国の御家人、津の戸の三郎為守は、生年十八歳にして、治承四年八月に、幕下將軍「于時兵衛佐」石橋の合戦のとき、武蔵国より馳まいるのち、安房国へ越給しにも、おなじく、あひしたがひ、処処の合戦に、忠をいたし名をあげずといふことなし。建久六年二月東大寺供

養のために、幕下上洛の事ありき。為守生年三十三にて、供奉したりけるが、三月四日入洛し、同廿一日上人の庵室にまいりて、合戦度度のつみを懺悔し、念仏往生の道をうけたまはりてのちは、但信称名の行者となりにければ、本国にくだりても、をこたりなかりけるに、ある人、熊谷の入道、津戸の三郎は無智のものにて、余行かなひがたければこそ、念仏ばかりをばすゝめ給らめ。有智の人には、かならずしも念仏にはかぎるべからずと申けるを、為守つたえきゝて、上人にたづね申けるついでに、条々の不審を申いれけり。上人の御返事云、(中略)

極たるひが事に候。そのゆへは、念仏の行はもとより有智無智にかぎらず、弥陀のむかしちかひ給し本願も、あまねく一切衆生のためなり。無智のためには念仏を願じ、有智のためには余のふかき行を願じ給ふくとなし。

### 史料5 熊谷次郎直実

・『法然上人行状絵図』第二十七

武蔵国の御家人、熊谷の次郎直実は、平家追討のとき、所所の合戦に忠をいたし、名をあげしかば、武勇の道ならびなかりき。しかるに宿善のうちにもよをしけるにや、

幕下將軍をうらみ申事ありて、心ををこし、出家して、蓮生と申けるが、聖覚法印の房にたづねゆきて、後生菩提の事をたづね申けるに、さやうの事は法然上人に、たづね申べしと申されければ、上人の御庵室に参じにけり。罪の軽重をいはず、ただ念仏だにも申せば往生するなり、別の様なしとの給をききて、さめざめと泣ければ、けしからずと思たまひてももの給はず、しばらくありて、なに事に泣給ぞと仰られければ、手足をもきり命をもすててぞ、後生はたすからむずるとぞうけ給はらむずらんと、存ずるところに、ただ念仏だにも申せば往生はするぞと、やすやすと仰をかふり侍れば、あまりにうれしくて、なかれ侍るよしをぞ申ける。まことに後世を恐たるものと見えければ、無智の罪人の念仏申て往生する事、本願の正意なりとて、念仏の安心こまかにさづけ給ければ、ふた心なき専修の行者にて、ひさしく上人につかへたてまつりけり。

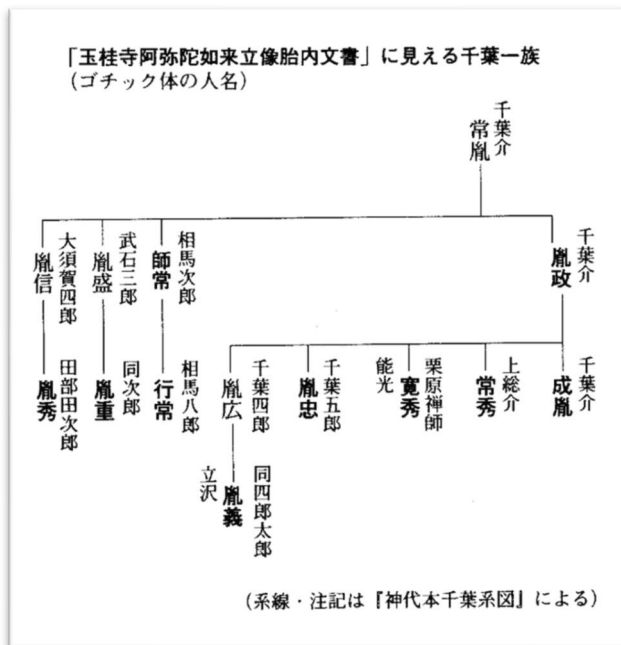
### 史料6 『法然上人行状絵図』第二十六

(前略) 忠綱武勇の家にむまれて、弓箭の道にたづさはる。すゝみては父祖が遺塵をうしなはず、しりぞきては

子孫の後栄をのこさむがために、敵をふさぎ身をすてば、悪心熾盛にして願念発起しがたし。もし今生のかりなるいはれをおもひ、往生のはげむべきことはりをわすれずは、かへりて敵のためにとりこにせられなむ。ながく臆病の名をとどめて、忽に譜代の跡をうしなひつべし。いづれをすて、いづれをとるべしといふ事、愚意わきまへがたし。弓箭の家業をもすてず、往生の素意をもとぐる道侍らば、ねがはくは御一言をうけ給はらんと申ければ、上人おほせらるゝ様、弥陀の本願は、機の善悪をいはず、行の多少を論ぜず、身の浄不浄をえらばず、時処諸縁をきはざれば、死の縁によるべからず。罪人は罪人ながら、名号をとなへて往生す。これ本願の不思議なり。弓箭の家にむまれたる人、たとひ軍陣にたゝかひ、命をうしなうとも、念仏せば本願に乘じ来迎にあづからむ事、ゆめゝゝ疑べからずと、こまかにさづけ給ければ、不審ひらけ侍りぬ。

史料7 旧玉桂寺阿弥陀如来像像内文書（水野敬三郎二〇〇四年）

秦宗実 平氏 氏安／藤原氏 有阿弥陀仏 藤原氏 橘惟兼 同氏 藤原守国 俊兼 七郎 橘氏 藤原師実 全氏 大伴守安 大伴正師 同正守 藤原氏 大伴氏 藤原氏／平胤政 得阿弥陀仏 寛秀 平常秀 平成胤 平胤忠 平胤重 景忠入道 同氏 同忠常 同政保 苺田弘重 平常代 兼慶 苺田成基／平光長 平光高 豊嶋保忠 丹治常能 源真忠 伴胤元 源真村 中臣忠高 平延重 文部忠能 平胤秀 苺田重家 文屋重信 中原光高／源成忠 源助遠 平氏 中臣忠茂師法 同忠清 中臣秀忠 中原 盛行 苺田成高 藤原貞利 源有縄 丹治家茂 源忠能 平義高／平胤義 源氏 経阿弥陀仏 滋野忠澄 藤原氏 同氏 源成重 平氏 中臣忠重 藤原氏 伴胤友 藤原助正 乃阿弥陀仏 大部貞包師法 藤原真成



(野口実 1996年)



史料9 良忠撰『浄土大意鈔』(建長二年・一二五〇成立)

(中略)

善知識用意事

先善知識名聞利養心止大慈大悲思發へシ又善知識善惡二事ヲイテ病者意違マシキ也タトイ惡ナリトモ一往隨様能能心取ヲウセテ後懇教誘へシ惡事ナレトモ終リニハ制止加善事ナレハトテ折節知ラス心付ナケニ勸懲緣發事ハアレトモ隨事ナシ能能心取後

(中略)

念佛者常意得事

先師云經論中六念八念九念明スト云へトモ如我只念死念佛二念有教示セラレ候此一言千念ヨリモ重實此二念常思ハニ過タル事有ヘカラス念死云ハ終遁

史料10 良忠撰『浄土宗行者用意問答』(正嘉二年・一二五八成立)

〇十二造罪念佛之事

問云罪業深重ノ者阿彌陀佛ノ名號ノ功德ヲ聞テ彼心ヲ改悔シテ念佛セン程ニ又前ノゴトク罪ヲ造リテ又懺悔念佛セン者モ佛ノ本願ニ背クマジキ歟如何  
答云コノ事ハ機ニ隨フベキナリ懺悔ノ心ハ強ク造罪ノ心ハ恐レ恐レ犯サン者ハ念佛ニ依テ往生スルニテ候

〇十三造罪往生之事

問云罪業ハ惡因ト我心ニモ存知ナガラ物ヲ殺ス徒モ念佛ダニ申サハ往生ヲ遂ベキ歟如何  
答云造罪念佛ノ者ノ往生ヲ遂タル因緣餘多候但其ヲ憑ンデ恣ナランハ既ニ是邪見ナリ

史料11 良忠撰『選択伝弘決疑鈔』(建長六年・一二五四成立)

(中略)

談話之次賓客勸云若不染翰巨納心府且示一隅早叩三端此公特授精靈歸心正法家雖繼脂兵車之跡上身猶訪下艤法船之路因而有請焉予羊心易迷鳩眼難變庸才之身深慙此請非文非義是拙是愚然而聿順來命慙以書之號曰選擇傳弘決疑鈔傳者傳於先師也弘者弘於遺弟也決疑者假立賓主粗解疑關鈔者拙乎衆文題之筆點是故總言傳弘決疑鈔也庶幾百世萬代克赴易行別火界矣屆西刹焉時也建長六年仲秋上旬始添露點漸作艸篇云爾

史料12 良忠撰『決答授手印疑問鈔』(康元二年・一二五七成立)

上總周東有在阿彌陀佛者始歸念佛授手印而入念佛門後依念佛名義集粗辨往生念出離之安心雖仰信此集義然遇他門人僅以聞觀經疏信與解相違非無其疑殆加之將寄故上人之一門亦有錫楯依之或往至蓮華寺而聽上人口決或尋

史料13 良心撰『授手印決答受決鈔』(正心六年・一二九三成立)

緣起事

問決答緣起大略以序被載之其相委細示之給答逕年序一事是久似廢亡之雖爾可宣申所存在阿本爲台家學者重彼宗義然受吐血病思餘命短促捨世名利仍歸念佛門偏期往生其相決答序被載之在阿卷初記授手印疑問來下總薩差庄福岡上人御坊檀那椎名八郎入道千葉一門也自言某依病訪往生道深歸授手印而不審多之就御談義問承御口傳自記之殘命間蘇心仍一兩日之間止餘談義決此疑在阿或時計客殿詹吐血杯器一計仍歎殘命不幾至朝自言某餘命可短促疾欲解疑關若問疑決定可逕數日且又自註記自有謬失歎望請甚雖有恐所歎異他願預自記仍上人記兩卷鈔性心本最初記御草案此爲諸本本性心書一本進上人

史料13 良心撰『授手印決答受決鈔』(正応六年・一二九三成立)

問上人從下總移住鎌倉由來如何答上人初住福岡後依荒見彌四郎千葉一門也福岡荒見中門四十里請住彼其所有別所云飯岡二十四人發起衆各營五箇日宛雜事記此抄時學侶一百八人也漸漸退出然日日無缺退一人性心乘圓理真如心等五六人也傳通記筆執者性心也餘人談長西等餘流抄物及引要要經論章疏文此議云談處無人不足要要事仍一日番役七人宛也飯岡始之福岡終之時發起衆於調錄時欲寫此抄時上人云此抄爲傳法故不學無智族寫之有何要哉有寫人不寫人發起衆中雖營五箇日宛雜事無懈怠長日故不能堪倦不參談處一人不寫之也其後移住鎌倉給也其由來者椎名八郎入道荒見彌四郎不和故也或時八郎入道對上人自歎云某雖狹少身奉扶養上人事實幸事也云上人云全無入道殿扶養云云禪門云此仰淺猿事候如形弊坊一字田一町奉進爭無扶育義上人云此在家田畠以直所買得也云云禪門云全其義不候上人御住宅後何年月給

直上人云其時川途何貫其時用途何百進非直乎禪門云某爲疋弱身鎌倉上下是常事也哀之被許用途此非直上人云沙門貧乏無緣者也爭閣我身命所領知行地頭可奉用途乎所詮借用本意爲室宅田畠歟故都無返報思隨禪門意云不可返義也時禪門默止畢荒見彌四郎兼進一町五段田或時申不斷念佛之志致三町田約束上人大悅先破過舊家造假御堂大門左右分六列坊地其中性心釋阿彌陀佛速疾造菴室畢上人得此田欲配分時衆既至下種時無寄進義時蓮光房云者此乘圓理真從父舅也此人所名主分也爲學衆間申上人云在家出家心異在家法寄進田畠始常法期永代事吞酒取引出物若彌四郎殿有此志乎此上人云サル意モアリトテ造酒處學衆看仰時珍物取集如山折節酒味殊勝也此一向性心沙汰也十貫錢與地主二貫與政所三郎兵衛三貫錢分與共人政所云今年アキ處候ハス仍期來年云云時上人成恨云田舍人盜人也仍抽下住鎌倉

志<sup>ラ</sup>上<sup>ニ</sup>時國中學者終不<sup>レ</sup>來爲不<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>人馬等要事<sup>一</sup>也無<sup>ク</sup>  
 殘<sup>ル</sup>一物<sup>一</sup>全令<sup>ニ</sup>移住<sup>一</sup>故雜物其數是多仍設<sup>シ</sup>多馬登<sup>ニ</sup>  
 鎌倉<sup>一</sup>坂東者性心理眞明阿其外大略西國志<sup>一</sup>修行者也  
 仍竹<sup>ヲ</sup>負<sup>ケ</sup>カケ馬口引等也道路人怪見<sup>レ</sup>之登<sup>テ</sup>鎌倉<sup>一</sup>玉<sup>ハ</sup>  
 ハニトマリ次朝行<sup>ニ</sup>慈恩房菴室<sup>一</sup>慈恩房傳<sup>ニ</sup>聞上人御  
 事<sup>一</sup>一兩度通<sup>ニ</sup>於狀上人許<sup>一</sup>是記トスル也共<sup>ニ</sup>慈恩房<sup>一</sup>  
 遇<sup>ニ</sup>大佛淨光聖<sup>一</sup>淨光聖言志雖<sup>レ</sup>切<sup>ト</sup>大營未<sup>レ</sup>遂故可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
 如<sup>レ</sup>志<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>進<sup>ニ</sup>四人所食<sup>一</sup>造<sup>ニ</sup>一字坊<sup>一</sup>雜人等至<sup>ニ</sup>鎌倉中<sup>一</sup>  
 造<sup>ニ</sup>小家<sup>一</sup>賣買其後神六入道無常堂造<sup>ニ</sup>菴室<sup>一</sup>請入有<sup>ニ</sup>  
 法談<sup>一</sup>云云

史料14 聖罔撰『浄土述聞口決鈔』(康安元年・一三六一成立)

今此述聞製作之緣起者先師<sup>六十二</sup>依<sup>シ</sup>下總<sup>一</sup>國海上船木<sup>一</sup>  
 中務禪門之請<sup>一</sup>下<sup>ニ</sup>向彼所<sup>一</sup>住<sup>ニ</sup>稱名寺<sup>一</sup>三箇年也於<sup>ニ</sup>其<sup>一</sup>  
 間<sup>一</sup>御談義更無<sup>レ</sup>闕日然間於<sup>ニ</sup>御談義<sup>一</sup>之次<sup>一</sup>出<sup>ニ</sup>自門人<sup>一</sup>  
 人異義<sup>一</sup>而難<sup>レ</sup>之述<sup>ニ</sup>相傳<sup>一</sup>之自義<sup>一</sup>作<sup>ニ</sup>一卷書<sup>一</sup>號<sup>ニ</sup>之口<sup>一</sup>  
 傳鈔<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>是船木禪門頗有<sup>ニ</sup>書寫所望<sup>一</sup>仍被<sup>レ</sup>許<sup>レ</sup>之禪門

寫<sup>ニ</sup>取<sup>テ</sup>之<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>尊觀直弟南無阿彌陀佛<sup>一</sup>彼人書<sup>ニ</sup>寫<sup>一</sup>  
 之<sup>一</sup>遣<sup>ニ</sup>尊觀許<sup>一</sup>尊觀披<sup>ニ</sup>見<sup>一</sup>之作<sup>ニ</sup>一卷釋<sup>一</sup>而難<sup>レ</sup>之名<sup>一</sup>  
 之<sup>一</sup>疑問鈔<sup>一</sup>乃尊觀召<sup>ニ</sup>盛蓮房<sup>一</sup>後承<sup>ニ</sup>先師<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之盛蓮  
 房云<sup>ク</sup>非<sup>レ</sup>私加<sup>ニ</sup>一見<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>之坂下見<sup>一</sup>參<sup>ニ</sup>候耶云云  
 尊觀云<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>子細<sup>一</sup>仍持<sup>ニ</sup>參<sup>一</sup>之奉<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>先師<sup>一</sup>先師亦救<sup>ニ</sup>  
 彼疑問難<sup>一</sup>製<sup>ニ</sup>一卷文<sup>一</sup>乃今述聞鈔是也此鈔緣起如<sup>レ</sup>

史料15 聖罔撰『伝通記糅鈔』(応永二年・一三九五成立)

天十一年也○光明寺者在<sup>ニ</sup>大湏賀<sup>一</sup>郷飯岡<sup>一</sup>○正嘉二曆  
 者亦是同御宇也○西福寺者在<sup>ニ</sup>匝蹉庄<sup>一</sup>福岡<sup>一</sup>且那<sup>ハ</sup>椎名<sup>一</sup>  
 二年一回餘十三月終功已畢<sup>ニ</sup>述<sup>一</sup>功趣<sup>一</sup>於<sup>ニ</sup>中<sup>一</sup>○或載

史料16 聖瞻撰『五重拾遺鈔 中卷』(永享十一年・一四三九成立)

☒ 末代念佛授手印之下  
 【鈔】成覺房等者彼人依<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>放門徒<sup>一</sup>下州  
 栗原郷移住<sup>ニ</sup>勸道俗<sup>一</sup>今彼門人在<sup>ニ</sup>之<sup>一</sup>云云

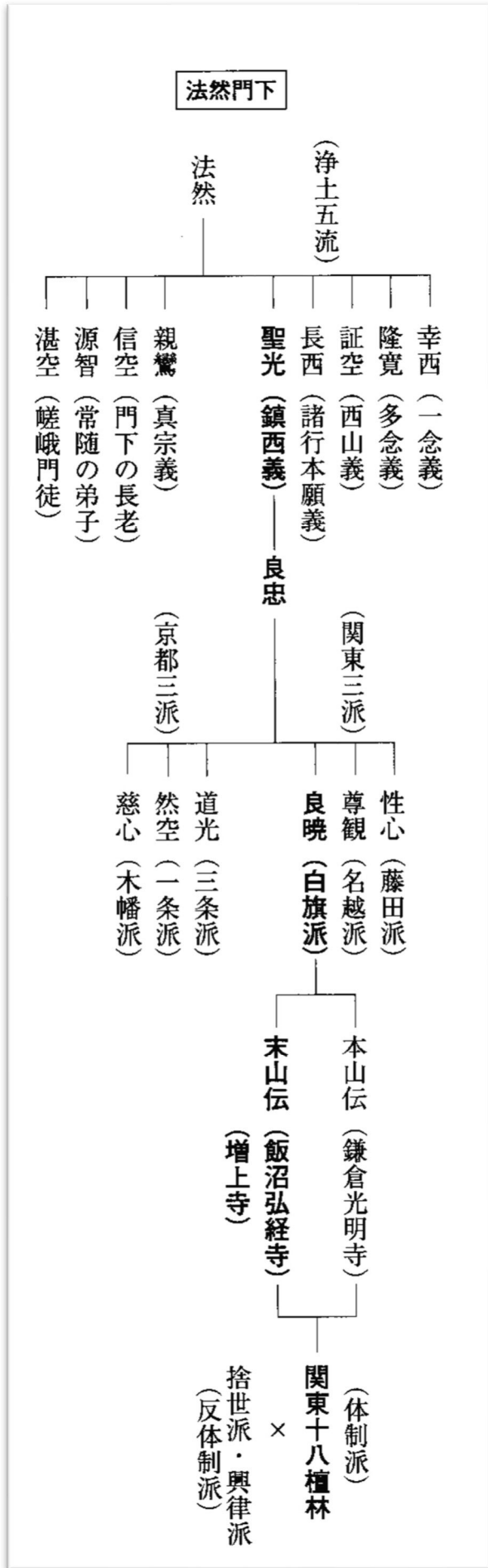


史料17 直誉相関撰『了誉上人伝』(貞享二年・一六八五版行)

(鈴木英之二〇一二年)

然シテ後ニ、下ノ総州千葉ノ一家、頻ニ依テ二悃請スルニ一応スレ之ニ。  
 弁奮テ二懸河ヲ一、弘ニ通シ念仏ヲ一、度スルコトニ於道俗ヲ一、不レ知  
 ラレ幾ト云コトヲ也。爰ニ千葉ノ介氏胤カ之次男徳寿丸、始ハ投シテ  
 州ノ明見寺ニ一翦落シ、且ツ学スニ真言ヲ一、後ニ慕テ二岡ノ徳輝ヲ一、  
 師トシ事ヘテ改ムニ宗ヲ於浄土ニ一、竭シレ誠ヲ伝法受戒ス。名テ号スニ  
 聖聰ト一。叡明絶倫ナリ也。

史料18 浄土宗門流系図(宇高良哲 二〇一五年)



No	寺号等	市町村名	宗派	伝存像	刻銘和暦	西暦	備考
1	智光院	千葉市中央区	新義真言宗豊山派	脇侍			鎌倉後期
2	正善院	千葉市稲毛区	新義真言宗豊山派	脇侍頭部			鎌倉中期
3	東光院	千葉市緑区	新義真言宗豊山派	脇侍像			木造、鎌倉末期
4	満光院	市原市	新義真言宗智山派	中尊	文永11年	1274	「浄光上人」等銘
5	光明寺	松戸市	新義真言宗智山派	中尊	応永23年	1416	
6	善光寺	松戸市	浄土宗	三尊像	安永7年	1778	
7	本福寺	松戸市	時宗	三尊像			室町時代
8	善照寺	柏市	時宗	三尊像			鎌倉後期～南北朝初期
9	浄観寺	流山市	新義真言宗豊山派		文久3年	1863	石造
10	長源寺	佐倉市	浄土宗	三尊像			鎌倉～室町時代か
11	善光寺	四街道市	新義真言宗智山派	三尊像			鎌倉～室町時代か
12	神宮寺	白井市	天台宗	脇侍像			室町時代
13	円光寺	成田市	時宗	三尊像	延慶2年	1309	
14	清光寺	酒々井町	浄土宗	三尊像	正安2年	1300	
15	修徳院	香取市	天台宗	三尊像	正応3年	1290	
16	織幡地区	香取市	元花見寺(真言宗)	阿弥陀如来像、 観音菩薩像			鎌倉、13世紀後半
17	善光寺	香取市	天台宗	中尊			室町時代末期
18	東光寺	銚子市	新義真言宗智山派	三尊像			中尊は鎌倉末期、両脇侍は近世の補作
19	如来寺	匝瑳市	天台宗	三尊像			鎌倉時代
20	西光寺	匝瑳市	新義真言宗智山派	中尊			室町時代
21	新善光寺	横芝光町	新義真言宗智山派	三尊像			鎌倉中期～後期
22	隆台寺	横芝光町	新義真言宗智山派	三尊像			鎌倉中期～後期
23	日吉神社	山武市	(元真行寺蔵)	三尊像			鎌倉中期
24	金剛勝寺	山武市	新義真言宗智山派	三尊像			鎌倉時代
25	行徳寺	茂原市	天台宗	三尊像			鎌倉鋼機
26	善光寺	一宮町	単立(天台宗系)	中尊			鎌倉末期
27	妙覚寺	長南町	天台宗	中尊			南北朝～室町時代か
28	笠森寺	長南町	天台宗	脇侍像			室町時代
29	長昌寺	睦沢町	曹洞宗	勢至像			鎌倉～室町
30	法興寺	いすみ市	天台宗	中尊像残欠と 脇侍1軀			鎌倉時代
31	東陽寺	いすみ市	天台宗	三尊像	永享4年	1432	
32	行元寺	いすみ市	天台宗	三尊像			鎌倉後期
33	三善寺	館山市	浄土宗	左右脇侍像			南北朝時代
34	善栄寺	館山市	新義真言宗智山派	三尊像(中尊は頭部のみ)			中尊頭部は鎌倉末～南北朝期、両脇侍は近代。江戸期作の中尊も伝存。
35	清澄寺	鴨川市	日蓮宗(元天台宗)	脇侍像	文永3年	1266	中尊は横浜市千手院所蔵、当初は山形県天童市・石仏寺安置
36	西徳寺	鴨川市	新義真言宗智山派	三尊像			南北朝～室町時代
37	紫雲寺	南房総市	新義真言宗智山派	脇侍像			鎌倉末期
38	木野根沢区	木更津市		中尊	正和5年	1316	鎌倉後期
39	善福寺	袖ヶ浦市	新義真言宗智山派	三尊像	文永11年	1274	前立は安永9年(1780)造
40	常照寺	袖ヶ浦市	単立(元新義真言宗智山派)	三尊像			焼損、鎌倉中期
41	松源寺	袖ヶ浦市	曹洞宗	中尊			木造、江戸時代